

峠

後編

司馬遼太郎

峠

後
編

司馬遼太郎

新潮社

峠（後編）

昭和四十三年十月十日 発行
平成三年五月二十日 五十六刷

著者 司馬遼太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

振替東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります

© by Ryotaro Shiba Printed in Japan, 1968.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

目次

鳥羽伏見……………七

江戸……………三六

横浜往来……………七四

越後へ……………一四一

故郷……………一五九

戦雲……………一九一

西 軍……………三〇

小千谷談判……………二五一

決 起……………二七九

越の山風……………二九〇

今 町 口……………三〇九

八 町 沖……………三二六

峠

(後

編)

鳥羽伏見

——殺されるだろう。

という覚悟で、継之助はこの建白書を上呈したのだが、公卿たちは意外に鈍感であり、これほど激越な文章をみてもべつに反応がなく、非蔵人をもって、

「たしかに読んだ。委細承知した」

という長谷三位の返事をきいたのみであった。

——委細承知した。

というのは、「薩長を追い出し、徳川慶喜の名譽を回復すべく努力する」ということなのか。

(それならば非常な効果だ)

と継之助はおもったが、相手のことばはいかにも手輕で、それほど決意がこめられていようともおもわれな

い。ともあれ、継之助は宿所の北野林静坊にひきあげ、藩主

牧野忠訓に復命した。

「お聴きとだけあったか」

と忠訓はよろこびの声をあげたが、継之助はなかなば浮かぬ顔でいた。

(公卿など、女郎のようなものだ)

女郎の起請文をたれも信用せぬように公卿のことばなど、信ずるほうがばかをみるのではあるまいか。

「ともあれ、徳川家へのいささかの義理が立った」

と、牧野忠訓はいった。家康のころから牧野家の当主は徳川十七将のひとりであり、徳川家の興隆とともに大をなした。いま徳川家が浮沈のさかいにあるとき、他の譜代大名は右往左往するのみでわずかの力をも出そうとはしない。牧野家は微力ながらもそれをした。忠訓はそのことに満足した。

「そうではないか、継之助」

と、忠訓はいった。

(なるほど、それで満足すべきか)

とも、継之助はおもう。

もっぱらのうわさでは、先日の小御所會議で土佐の山内容堂が、薩摩の島津と公卿の岩倉具視をむこうにまわしてすさまじい論戦をした。容堂はこの會議にのぞむにあたって大酒をのんで勇氣をつけ、長広舌をふるって徳川慶喜を

弁護し、薩摩の謀略を攻撃し、ついにはたれもが容堂の舌鋒にすくめられてしまった。が、その容堂でさえ、会議の休憩後は沈黙した。

——大勢は、ひとりふたりの弁舌ではどうしようもない。

と、容堂はあきらめたのである。あきらめつつも容堂は、

「これで関ヶ原の恩は返した」

と、あとでいった。土佐の山内家は、関ヶ原以前においては遠州掛川で五万石の小大名であるにすぎなかったが、関ヶ原の功により一躍土佐一国に封ぜられ、二十四万石の太守になった。その徳川家の恩をあの弁論をもって返した、と容堂はみずからをなぐさめたのである。

あの大藩の指揮者である容堂でさえその程度の力しかふるえなかったところからみれば、わずか七万四千石の牧野家としてはこれが精一杯のところだと思ふべきであろう。

継之助らが大阪にかえると、城内は破れるようなさざぎであった。

——京の薩長を討つべし。

というのである。会津藩兵と桑名藩兵の激昂がもっともすさまじかった。

「なにごとがおこったのです」

と、大手門のそばにいた顔見知りの会津藩士にきいた。林権助という名だった。

「江戸ではもう、いくさがおこっているのです」

と、林権助はいった。

(まさか)

継之助はおもったが、すぐ藩士たちを幕府の要人のもとに走らせてしらべさせたところなかば事実であった。

江戸で、暴徒が横行していた。白昼兵器をたずさえ、徒党を組んで富商の家などに押しこみ、捕吏がむかうと捕吏を殺傷し、とうてい町奉行所などの平時警察の力では手も足も出ない。しかもかれらはことごとく三田の薩摩藩邸にひきあげてゆくという。

——薩藩がかれらをおどらせている。

というのが、たれの目にもあきらかであり、かれらを鎮圧するにはその潜伏場所である薩摩藩邸を武力で攻撃する以外にない。

「武力で、薩州邸を攻撃すべきです」

と主張したのは、幕閣のなかでもっとも尖鋭的な幕府中心主義者である勘定奉行の小栗上野介忠順であった。

「われらに必要なのは、もはや勇気のみ」

と、小栗は力説した。

しかし江戸の閣僚たちはためらった。幕藩体制にあって

は、藩邸というのは国際間における外国公館に相当している。そこには治外法権がみとめられ、犯罪についての捜査権も幕府にはなかった。もしそれを武力で攻撃するとなれば、徳川家と薩摩藩とのあいだに公然たる戦争状態がおこるということになる。

「それでは、どうか」

江戸の閣僚は、迷った。

なぜならば徳川家における最高首脳はみな大坂にいらのである。慶喜をはじめ、首相の板倉勝靜（老中筆頭）もそうであり、それほどの重大なことを決定するのは大坂であるべきであり、江戸の留守居の官僚たちできめるべきではない。

「きめるべきである」

と、小栗は主張した。小栗は京における慶喜らの軟弱な態度にあきたらず、早くから薩長勢力の武力討伐論をとえ、しかもかれ自身の手でフランス政府と密約し、その資金兵器の援助をうけるという確約まで得ていた。

ついに小栗は押し切り、庄内藩に命じ、大砲まで用意し、この二十五日薩摩藩邸を包囲して焼いてしまったのである。薩人や暴徒の多くは逃げ、品川沖から薩摩汽船に乗って江戸を離れたという。

その報が、二日で大坂につたわった。大坂の会津藩士ら

は激昂し、

「当方も開戦し、京を攻め、薩長を追いおとすべし」

と、幕府要人にせまったのである。

城留守居の首脳が、府内三田の薩摩藩邸を砲撃し、それを全焼せしめ、薩人と悪徒数百人を駆逐した、という報をもたらししたのは、幕府の大目付滝川播磨守であった。

かれは江戸から軍艦に搭乗し、歩兵部隊を満載させて大坂にのぼった。

「すでに江戸ではいくさがはじまっている。上方はなにをしているのだ」

という調子の報告であった。大坂城の幕臣や佐幕藩士たちが沸き立ったのもむりはなかった。滝川は報告者であるとともに煽動者であり、同時に開戦を見越しての援軍の指揮官でもあった。

この滝川の報に接し、

——老中以下大目付にいたるまでほとんど半狂乱のありさまにて。

と、当時の記録にある。

河井継之助は、さらに事態を知るべく城内の御用部屋をたずねようとした。

御用部屋というのは、大目付や目付の詰めている高級事務官室であり、諸藩の藩士にすぎぬ継之助は、本来ならば

入れない。しかしつてをたのんで行こうとした。

つてというのは、横浜で知りあった福地源一郎（のちの桜痴）である。福地はこの時期幕府の外国方であり、大坂に詰めていた。

「行きや、いいんですよ」

と、福地は相変らずのどの障子のやぶれたような声でいった。

「たれが行ったってかまやしませんよ。あの様子じゃ、もう御用部屋じゃない」

「どうなのです」

「灰神楽が立ってまき」

福地は継之助を連れて行ってくれた。なるほどすさまじい。

平素ならば御用部屋というのは神殿のなかのようにしずかで、ひとびとの行儀はよく、袴にし、わひとつ寄せずに正座している場所であったが、いまはちがう。おおぜいが大あくらですわり、激論し、泡をとばし、コブシをふりあげ、畳をたたき、まるで盗賊のよりあい場所のようになっていた。

「どうです」

と、福地は小声でいった。この明治後新聞界の惑星的存在になる人物は、このばあい、幕臣としてこの危機に昂奮

するよりも、危機に混乱するひとびとのすがたを観察するほうにむしろ昂奮していた。

「あれが、松平豊前守ですよ」

と、福地は継之助のそでをひきながらいった。松平豊前守というのは大名のような印象の名だが、旗本である。幕府官僚として早くから才人の名が高く、慶喜の側近のひとりになり、奏者番から若年寄にすんだ。この人物の咆えていることばが、もっともすさまじかった。

「大坂にはなお薩人がうろうろしている。かれらを斬れ。斬った者には十五両ずつ褒賞をだす。これはどうか」

（その程度の男が、幕府の秀才官僚なのか）

と、継之助は昂奮するよりもむしろ肌の寒くなるおもいがした。

継之助はそのあと、老中筆頭の板倉勝静に拝謁を乞うた。

——越後の継之助か。

と、板倉はすぐゆるした。

板倉は、徳川政権の首相である。継之助の師匠の山田方谷の藩主であり、そういう因縁からこの貴人は継之助に格別な気持をもっているらしい。

城内における板倉の執務所は二間つづきの部屋で、継之

助は次室にすわらされた。

「京はどうであつた」

とたずねる板倉の頬は、ここひと月ほどの心労で肉が薄くなっている。継之助は京でのことを報告した。

「そうか」

板倉は、無感動な表情でうなずいた。本来ならばよろこぶべきところであろう。継之助の薩摩弾劾文ともいうべき建白書に対し、長谷三位は、

——委細、承知した。

という返答をしたのである。しかし事態は継之助の長岡藩程度の奔走などは砲車の前の小石のようではない。

事態は、大地をゆすぶる地震のように進行していた。継之助の京都ゆき程度のこととは、地震のなかで御幣を振って祈禱をした程度のことではない。

「江戸のことは聞いたか」

「うかがいましてございます」

「みな、騒いでいる」

「尾州侯、越前侯のご調停はいかが進んでおりますよう」

この事態のなかで、尾張の殿様と越前の殿様が京都派にも親密であり、かつ徳川家に対しては尾州は御親藩、越前福井は御家門という家柄であるため、京・大坂のあいだを奔走して慶喜の立場を救済しようと努力をかさねていた。

「どうも、むだにおわりそうだな」

「と申されますのは？」

「江戸の騒ぎだ」

と、板倉はにがい顔をした。

「江戸の忠義者が、とうとう大砲をひきだして薩州邸を撃つてしまった。これで尾州と越前の御奔走も、水のあわになるだろう」

(ひとごとのような)

と、継之助は板倉のもののいいかたが気になった。このひとだけが徳川家の柱石の立場に立たされており、事実、その任に堪えるだけの頭脳はある。しかしながらなにぶんのところ殿様であり、性根のどこかが雲に乗っているような気配がした。

「わしはこういう事態にならぬよう、ずいぶん江戸にも言っておいたのだが」

「されば、開戦でございますか」

「いや、それは得策でない。まだまだ打つべき手があるうし、上様もそのおつもりだ。ところが、下が騒ぐ」

「非常な騒ぎでござりまするな」

「ああ、煙硝蔵に火がついてしまったようなしまつだ。これでは戦になるかもしれぬ」

表情が、暗い。

「御前は」

と、継之助は言いかけ、あやうく口をつぐんだ。老中板倉伊賀守勝静かつしずに対する辛辣なことが出そうで、さすがにつつしんだのである。

（このひとはだめだ）

と、継之助はおもった。

先刻からきいていると、徳川政権をとりまく苛烈な政治情勢や事件につき、首相として身の瘦せるほどにはなやんでいる。その情勢のつかみかたもたしかで、分析もするどい。しかしそれだけである。

（身を捨てていない）

いや、本人はすてているつもりであろう。たしかに板倉勝静は忠誠心もつよく、憂国の情もふかく、思考も明敏で、さらに利己心がなく、おのれをかばうところがなく、自藩のことなど家老の山田方谷にまかせきりでかれ自身は国事に没頭しており、首相たるものの器質としては条件がそろっている。たった一点、勝静は勇猛心に欠けていた。水をかぶって火事場の炎のなかにとびこんでゆく不退転の気魄に欠けているというべきであろう。百才があってもこの一事に欠けていれば一国の政治などではできないものではない。

（それゆえ）

と、継之助はおもった。板倉勝静が政局を語る語り調子は、どこか、絵巻物の絵の説明をしているような頼りなさがあり、最後には、

——こまった、こまった。

という感想しかない。そのような態度や性根でこの危難に対処できるであらうか、と継之助はおもうのである。

「継之助」

と、板倉はいった。

「ものを言いかけてやめるのはよくない。そののと奥でとめているものを、すぐ申せ」

「はて」

継之助はわざと首をかしげたが、しかしすぐ決断した。言おうとおもった。

「博徒などがよく命を張ると申します。事の成否はべつとして、もし継之助が御前ならば単身京にのほり、御所に乗りこみ、徳川家のために決死の弁をふるい、聞かれざれば御門前までひきさがり、砂上を借りて腹を切ります。事というものは、そういう方法でしか解決できぬときがあるものでございます」

「残念だが」

と、板倉はいった。

「わしは大名だ。大名がどういうものか、そのほうは存じ

ておろう」

大名には多数の家来がいる。家来たちが、殿様にそのようなまねをさせないし、第一、殿様をひとりで京の敵地にゆかせるようなこともさせない。

（だから大名を幕府の高官にするということがまちがっているのだ）

「継之助、言え」

と、板倉勝静はいった。

「いま、徳川家とすればどのようにすれば最上であるか、それを言え」

継之助はしばらく無言でいた。やがて、

「すべてが、よろしくございませぬ」

といった。いまの幕府当局者のやりかたはなっていないというのである。

「ここは大坂でござる。京へは十三里」

と、継之助はいう。

「かような近いところに大軍を駐^{とど}めておいて何事もなさずに日をお過ごしなされば、戦士どもの気はいよいよ荒だち、京へ攻めのぼろうということに相成りましょう」

「攻めのほれば？」

老中筆頭板倉伊賀守勝静はあごをあげた。

「御味方の負けでございます」

「継之助も、左様におもうか」

板倉もそう見ている。上様である徳川慶喜もそう見えた。しかしこの見通しを、他の高級官僚や会津・桑名藩士は断乎^{だんぷ}として非であるとしていた。かれらは、

——かならず勝つ。

とみている。京の薩長軍は土佐をあわせても三、四千というところであり、大坂の徳川軍は三、四万の人数を擁している。兵の精強さからいっても日本一といわれる会津藩士が千人もあり、武器の新鋭からいっても、なるほど会津藩兵は旧式装備かもしれないが幕府歩兵の銃器は薩長が装備している元込銃とかわらない。

かつ、大坂湾から紀淡海峡にかけての海域には幕府海軍がその総力をあげて艦隊を集結させており、この封鎖のため京の薩長軍は兵員の補給は不可能であった。

——勝つ。

とかれら開戦派がみたのは当然であり、敗北の見通しをもっているのは、徳川慶喜と、その首相である板倉勝静のふたりきりなのである。

「なぜ、継之助はこれを負けると見る」

と、板倉がきいた。

——政治で負けるだらう。

というのが、継之助の観測であった。開戦をしても、開

戦に必要な名分がない。天下を昂奮させ、天下をあげて徳川方を支持せしめるようなそういう名分がなかった。この点で政治的にきわめて脆弱である、と継之助はいう。

さらにまた、と継之助はいう。薩長に幼帝をうばわれているのである。

「これが、いかにもまずうございましたな」

と、継之助はいった。江戸末期以来、尊王論が普及し、いまや民間の読書人にまで滲みわたったほどの普遍化した思想になっている。現に慶喜も尊王であり、板倉も早くから尊王であり、さらに徳川家に対してもっとも強烈な忠誠心をよせている会津藩が、遠い時代の藩祖以来、神道を信奉し、尊王という点ではもっとも伝統がふるい。

その「王」を、薩長にうばわれている。いま京に攻めのほれば一旦は勝てるかもしれないが、薩長軍は幼帝を擁して各地を転々とし勤王の義軍を天下につるのであろう。そうなれば天下の勤王家、野心家、浮浪が立ちあがって結局は徳川軍は孤軍になり、上様は国外に亡命でもせざるをえないだろうと継之助はいうのである。

「わかつている。わしもその見方にかわりはない」

と、板倉勝静はいった。負けるということに、である。

「それで、どうすればよろう」

「うろろうなさらずに」

継之助はいった。

「一刻も早く関東にひきあげられること、このこと以外に方法はございませぬ」

関東は幕府の根拠地である。江戸には懦弱な都会人になりはてているとはいえ旗本八万騎がいる。さらにその背後地の関八州は家康以来の直轄領がほとんどであり、大名たちも外様は一家もなく、ことごとくが親藩、譜代藩である。上様以下すみやかにその関東にもどり、そのうえで後図を策さるべきである、という。

「後図とは？」

「それはわかりませぬ」

継之助はいった。

継之助にいわせれば、上様は関東にもどってまず内政をおさめよ、武備を精妙にせよ、外国貿易を活発にして富をゆたかにせよ、という。

「それで、京と戦うのか」

と、板倉はおどろいた。

「べつに」

継之助は苦笑した。

「戦わなくてもよろしゅうございましょう。戦う戦わぬということでなく、戦えばかならず勝つ態勢さえととのえれば物事は諸事うまくゆくものでございます。外交は自然に